

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第十八回）

ひなもり うまや

「夷守の駅家」

福岡県糟屋郡粕屋町日守社

・九州（筑紫）で詠われた万葉歌の中に大宰府の官人たちが都へ立つ人達を見送る際に宴を開き、送別の言葉にした歌がいくつかある。次の二首の歌はその一つである。

・題詞は大宰大監大伴宿禰百代ら、駅使に贈る歌二首とある。

*「駅使」は古代、駅馬や駅家を使うことを許された、公用で急行する使者および公用で旅行する者。

・この歌の左注によれば、天平二（730）年の夏六月、大宰府の帥（長官）であった大伴旅人は重い脚の病にかかり、危篤状態になった彼は遺言したいと思ひ、一族の稲公、胡麻呂を大宰府に派遣してくださるよう朝廷に申し出たのであった。旅人の異母弟の稲公と甥の胡麻呂は勅命（天皇の命令）によって大宰帥である旅人の遺言を聞くために、都から筑紫（九州）にくることになった。しかし二人が到着後、幸いに、旅人は数十日ののち快方に向かった。都から来た二人は、それを見とどけ大宰府を去ることになった。大宰府では大伴宿禰百代らが都に帰る稲公と胡麻呂を夷守の駅家まで送ってきて、勝れた博多湾の風光を賞しながら別れの小宴を開き、この二首の歌を贈って、この地で互いに別れを惜しんだのである。

うるは

1) 草枕 旅行く君を 愛しみ たぐひて

こしか

ぞ来し 志賀の浜辺を

卷四―566

作者

だいげん 大監・大伴宿禰百代

(解説)・都に向けて旅立って行く君たちが慕わしく離れがたいので、つい連れ

だつて来てしまった。志賀の浜辺の道を。

すは

いはくに

2) 周防にある 岩国山は 越えむ日は 手向けよ

たむ

くせよ 荒しその道

卷四―567

作者

せうてんやまぐちのいみきわかまる 少典山口忌寸若麻呂

(解説) この歌は旅路の安全を祈る送別歌である。

・周防の国(現・山口県東半部)にある岩国山を越える日には峠の神に手向けたむをしなさい。けわしく危険な山道ですよ。その山道は。とおもんばかつている。山陽道は、都から筑紫に通じる官の大路。

しかし、周防の岩国山越えの道は、天下に聞こえた険しく、恐ろしい道であったのであろう。

・この時代は旅先で越えて行く山や坂・峠の神、途次の社に幣ぬさ(神前に供える物)を手向けて無事を祈ったのである。

・また、前田淑著「大宰府万葉の世界」で、この歌の左注から、この見送りの

一行に大伴旅人の嫡男で「万葉集」全二十卷の掉尾を飾る歌を詠んだ当時、13歳の少年・大伴家持が加わったと見られ、大宰府に赴任していた大伴百代はその後見として、大宰府官人としてよりは、大伴一族の代表として見送り、感謝の意を述べたものであろう。大宰府からは当時、少典せうてんの職にあった山口若麻呂が見送ったようであると述べている。

・当時、奈良の都（平城京）との交通手段は、主に馬によってなされていた。

・大伴百代などが駅使を送った「夷守ひなもりの駅家うまや」は当時、大宰府から都に向かう官道で博多湾岸・響灘沿岸をたどり西海道の東端「社埼（文字ヶ関）」現・北九州市門司に到る湾岸コースにある。

・大宰府からこの惜別の宴が開かれた夷守ひなもりの駅家うまやへは大宰府（水城）東門から北東約16キロ離れた博多湾岸にあった美野駅よしの（現・博多駅付近推定）から東（現・北九州方面）に曲がり、その途次にある「夷守ひなもりの駅家うまや」に向かう。

・「駅家」は古代の交通制度で緊急連絡の早馬を初め公文書の递送などを主とした通信連絡の制度で、公用旅行者に食料と宿泊所を提供し、許可者には伝馬でんまに乘用させる制度（駅制）であった。

・この制度は木下良氏は歴史地理的に見た「道の万葉」の中で駅制は目的地に最短距離で到達するように直線的路線をとる駅路を新設し、それに沿って三十里（約十六キロ）を基準に設置された駅家に駅馬を配置した。駅路は現代の高速度道路と性格が似ており、両者の路線が共通することも多い。と述べている。



・「夷守の駅家」ひなもり うまやは一説には福岡空港（福岡市博多区）から北東約1.5 km

離れた地に鎮座する「日守神社」ひまもり（福岡県糟屋郡粕屋町Z仲原）なかばる「付近にあったとされる。粕屋町はこの神社内に「夷守の駅と歌碑」ひなもりの説明板を建てている。

・福岡市に隣接する粕屋町日守社はJR篠栗線（福北ゆたか線）ゆす柚須駅（博多駅から二駅目）の東方約1 kmの位置にある。もともとのこの一帯は農村地帯であつたが、現在は工場、住宅が建ち並び日守神社は参道を少し残し民家に取り囲まれ町の鎮守さまとして鎮座している。

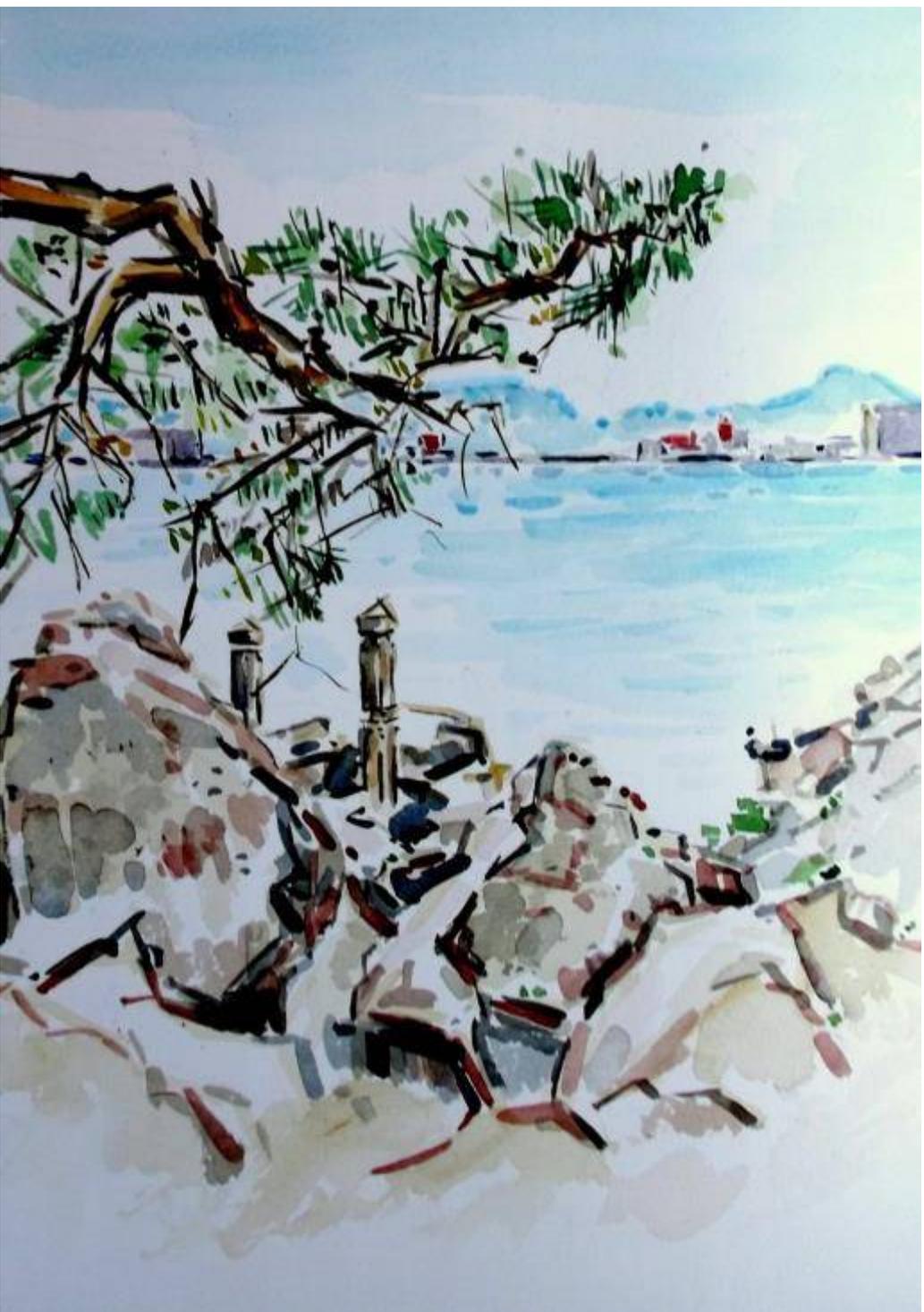
・長い歴史を感じる鄙びた社「日守神社」ひな境内風景を描く。（杏花）

・博多湾から、今、夷守ひなもりの駅家うまやに推定されている日守神社は南東約3 kmの内陸側にあり、万葉歌に詠われている「志賀の浜辺」は見ることではできないが、粕屋町史には江戸時代後期の福岡藩を代表する学者青柳種信は「筑前続風土記拾遺しゅうい」において延喜式の夷守ひなもり駅は四鹿浜やしろ（志賀の浜）なるべし、仲原村（現・粕屋町仲原）の志賀神社は古き社やしろにて、自らこの辺の大名を志賀といいたるなるべし。と述べて、志賀神社周辺に「四鹿浜（志賀浜）」があり、そこには「夷守ひなもり駅」もあつたと作者は考えている。志賀神社は夷守ひなもり駅推定地「日守神社」から更に約1 km南の地に位置し現在の博多湾より約4 km内陸側にあるが、この辺りまで志賀浜が湾入していたことが粕屋町史に掲載される古地図より想定される。

巻四―566で詠われている「志賀の浜辺」は今でも日守神社付近（柚須辺り）の田を掘ると貝殻などが多く出土するという。このことから古地図で推定されている志賀神社辺りまで浜辺はあつたのではなからうかと思われる。

・この浜辺は町史によると江戸時代以降湾自体が少しずつ埋め立てられ田畑などにかえられていったとあり、今は住宅地、倉庫が立ち並び浜辺は遠くにはなれ、この地から万葉に詠われた原風景は見かけることができないが、古代の「夷守ひなもり駅」があつたと推定される粕屋町、福岡市東区を流れ福岡湾に流れ込む多々良川河口付近の浜辺にある神功皇后が三韓出兵で使用した船の帆柱が化石になつたとの伝説がある「名島帆柱石なしまほばし（国指定天然記念物）」周辺から、対岸にビ

ル等が建ち並んでいるが、今も風光明媚な「志賀の浜（今の博多湾）」風景が眺望できる。（杏花）



（参考文献）・前田淑著「大宰府万葉の世界」・新潮日本古典集成「万葉集」・万葉集を知る事典・糟屋町史等

● 夷守駅推定地（日守神社）位置図

